

## プティ・トリアノンのダイニングルームにおけるシリーズ装飾画に関する一考察 — 図像プログラムに見る王立建造物局の意図と受容のあり方の多様性について —

太田みき（学習院大学）

1768年、ルイ15世の命により、王立建造物局長官マリニ侯爵は、アカデミー書記長C.-N. コシャンに、プティ・トリアノンのダイニングルームのためのふさわしい主題と画家達を提案させた。コシャンはJ.-B. M. ピエール、L.-J.-F. ラグルネ、G.-F. ドワイアン、J.-M. ヴィアンらに《漁業》、《麦の収穫》、《ブドウの収穫》、《狩猟》を描かせることにした。一部の作品が拒否されたり、描き直しを命じられたりしたため、先行研究では、この装飾画はロココから新古典主義へと向かう過程で試みられた物語画復興の失敗例とされてきた。本発表では、18世紀後半を特徴づける文化行政の発達や受容層の拡大に関連付けてこの装飾画を再考し、これがいかに入念に構想されていたか、それにもかかわらず、なぜ紆余曲折を辿ることになったのかを明らかにする。

まず、王立建造物局の意図に照らして、ジャンル、主題、図像プログラムの分析を行う。本シリーズは伝統的な「月暦画」に基づき、当時、隆盛していた「四季」や「四大元素」を発想源としているが、人間の営みを司る神々を描いた神話的場面と、労働を扱った風俗的場面を同列させる点で、複数のジャンルの融合という18世紀の特徴を端的に示す。さらに、庇護者ボンパドゥール夫人の側近であるケネーの重農主義を反映し、コシャンは生産に焦点を当て、人間に恵みを与える神々の恩恵を強調する図像を考案した。これは、平和を愛し民衆を保護するルイ15世のイメージ戦略に合致し、社会的な意味を担う新しい物語画の創造の試みだった。

しかし、この装飾画は受容の段階で様々な困難に突き当たる。一つはサロン出品作に対する鑑賞者の批判、もう一つは、ルイ15世の死後、トリアノンの所有者が王妃マリー・アントワネットになったことによる一部の作品の拒否だった。例えば、ラグルネの豊かな創意、古代の蠟画法を思わせるヴィアンの表現は、多くのサロンの鑑賞者には理解されなかった。展覧会と美術批評の発達は、多様な趣味を持つ鑑賞者に発言権を与えたわけだが、王権に保護されるアカデミー画家に対するこのような批判には、専門家や美の真髄を解する愛好家によって占有されてきた美術に対する反感が窺える。一方、王妃の拒否には、王宮の空間と装飾画の機能に関するコシャンと王妃との認識の相違が看取される。コシャンはトリアノンを画家達の奨励と美術の進歩を示すための場と考えたのであったが、王妃は本装飾画の代わりにハプスブルク家の家族の肖像を設置しようとしたのである。

本装飾画の制作と受容の考察は、様式史にしばしば見られるロココ期の絵画に対する「装飾的」で「無意味」という単純な捉え方とは裏腹に、当時の装飾画を取り巻く諸問題の複雑さの一端を明らかにする。新しい物語画の創造の試みにもかかわらず、本装飾画が遭遇した紆余曲折は、この時代に特徴的な受容のあり方の多様化を端的に示すものであろう。